「京都伝統文化の森推進協議会クラウドファンディングとライブの「絶体絶命」鎌田東二

　メリークリスマス！　と世界中でキリスト生誕のお祝いの言葉が発せられるまさにその時期、国内外でクリスマス大災害が起こっていた。ホワイトクリスマスというようなエレガントでロマンティックな積雪ではなく、尋常ではない急速な度外れの積雪量。これまで見たこともないようなドカ雪、デカ雪、フカ雪。米国でも日本でも。

　一方、スペインでは考えられないような22度もある暖かさ。ホワイトクリスマスどころではない。ホットクリスマス。

　このような異常な気象が次から次へと押し寄せてくる。2019年9月1日に、「みなさん　天気は死にました」という一行から始まる『狂天慟地』（土曜美術社出版販売）、「天は狂い、地は慟哭している」と題する詩集を出したが、まさに「絶体絶命」の危機の中にあると私は思っている。

　そのような「危機」のありようを、2013年1月22日に同志社大学良心館で行なうシンポジウム「現代における宗教信仰復興を問う②　危機の時代における文化の継承と創造」の中で問いかけつつ、そこにおける文化の継承と創造について考察してみたい。

　その一つの危機打開の試みの事例として、「京都伝統文化の森推進協議会」のクラウドファンディングのことも取り上げたい。

私は比較文明学会設立の1993年以来の会員であるが、11年前に東日本大震災が起きた後、2012年11月の比較文明学会第30回学術大会＆地球システム・倫理学会第８回学術大会合同大会全体テーマ：「地球的危機と平安文明の創造」（個別テーマ「みやこと災害の文明論」）、2013年9月「災害と文明プロジェクト」に関わり、大会実行委員長やプロジェクト責任者を務めた。

　21世紀に入り、気候変動による災害の激甚化に伴い、京都の「平安」を根底的に支えてきた京都三山の荒廃がいっそう深刻となってきた。そこで、2007年12月、宗教学者の山折哲雄氏（元国際日本文化研究センター所長）を中心に「京都伝統文化の森推進協議会」（<https://kyoto-dentoubunkanomori.jp/>）が設立された。この時、清水寺や青蓮院門跡や上賀茂神社など京都を代表する寺社、京都市、林野庁、祇園商店街、京都市民らが連携して京都三山を未来につなぐ活動を始め、10年余に及ぶ活動を、京都伝統文化の森推進協議会編『京都の森と文化』（ナカニシヤ出版、2020年3月30日刊）にまとめた（注1）。

ところが、その本を刊行して、いっそう活発に活動を展開していこうとした矢先に、コロナ感染拡大による緊急事態宣言が出て、以来、活動が停滞してしまった。

2022年の本年は、比叡山を始め、京都の紅葉はとても美しく、観光客も戻り、比叡山も多くの観光客が訪れているが、その比叡山も、実態は、日増しに崩落が進み、寝返り倒木もそのままで、荒廃が進んでいて、たいへん深刻な事態なのである。私は2006年10月以来、2022年12月26日現在までに826回比叡山に登拝しているので、この16年間の比叡山や東山の変化をつぶさに目撃してきた。そして、その具体的な観察体験から危機感をいっそう深めている。

# そんな危機的な状態をどう打開するかという大きな問題を抱えているが、できることから始めようと、比叡山を北嶺、伏見稲荷大社のある稲荷山を南端とする東山、また鞍馬寺や貴船神社や花背などのある北山、また愛宕神社や高雄山神護寺のある西山を守る「京都伝統文化の森推進協議会」のクラウドファンディングを、＜荒廃が進む京都三山の「東山」　1200年の文化育む「共生の森」に整備したい＞と題して、京都新聞社のクラウドファンディング部門「THE　KYOTO」で始めた。

# 12月26日現在、「京都伝統文化の森推進協議会」のクラウドファンディングを始め、現在以下の通り450万円あまりの支援を得ているので、がんばれば、新年には目標額500万に届く可能性が具体的に見えてきた。多くの方々のご支援をいただき、本当に有難く思っている。ぜひ今後ともご支援をいただきたい。

# クラウドファンディングURL：<https://the-kyoto.en-jine.com/projects/denbunnomori>

以上は、身近な危機とその打開策についての事例を述べてみたが、もう一つの創造の側面について、近況報告的になるが、最近2つのことを行なった。

12月4日、35年ぶりに神道宗教学会第76回学術大会で、「痛みとケアの神としての大国主神」と題して研究発表した。「大国主神」については、出雲大社や神田神社などで、信仰的にも神学的にも考究されてきたが、私は伝統的な神学的把握を超えて、「痛みとケアの神」という現代的観点から大国主神を捉える視点を提示してみた。これについては、近々論文にまとめたい。

また、12月18日には、東京の碑文谷のライブハウス「APIA40」でサードアルバム「絶体絶命」レコ発ライブを行なった。全力を出し切り、爆裂した。そのライブパフォーマンス100分のすべてが、ライブハウスのAPIA40チャンネル配信の以下のYou tubeで無料で配信されている。以下のURLの14分前後から始まり、100分ほどのライブパフォーマンスである。「物狂い」カマタトウジをご確認いただきたい（注2）。

<https://www.youtube.com/watch?v=3PJy5R_Tmjc>

この12月18日のライブのことは、それを見た上智大学法科大学院生1年（彼は学部時代に私の授業2科目履修してくれていました）の萩原正大君が、「身心変容技法研究会」ＭＬに投稿してくれたので、そのやり取り4通を「絶体絶命」サイトに次のように掲載た。<https://kamatatojiztzm.amebaownd.com/posts/39973535>

　「絶体絶命」に危機をどう乗り越えていくか。私にとって、差し当たり、自分でできる方策は「地元の森を維持する活動」と「歌を歌う活動」の二種であった。それがどのような効果や意味を持つかはこれから確かめられるだろう。

かくして、冬至も一陽来復もクリスマスも過ぎ、いよいよ激動の2022年も終わろうとしている。2023年（日本では令和5年）、これからの3年はまさに正念場であると思っている。　12月26日　鎌田東二記

注

1. 京都伝統文化の森推進協議会編『京都の森と文化』（ナカニシヤ出版、2022年3月30日刊）は、次のような概要と執筆陣である。

＜京都伝統文化の森推進協議会＞
　宗教学者・評論家の山折哲雄氏が設立発起人代表となり、平成19年（2007）に設立された。再生不能の危機に直面していた京都三山を、世界遺産の清水寺、青蓮院門跡、高台寺、祇園商店街振興組合、そして林野庁近畿中国森林管理局からの協力を得て、伝統に則った森づくりを行い、京都の森を蘇らせる事業を展開している。

執筆者

鎌田東二：京都伝統文化の森推進協議会会長。京都大学名誉教授。著作『言霊の思想』(青土社)他。
勝占保：林野庁近畿中国森林管理局京都大阪森林管理事務所長（当時）。
森本幸裕：公益財団法人 京都市都市緑化協会理事長。京都大学名誉教授。
原田憲一：元至誠館大学学長。元比較文明学会会長。著作:『地球について』(国際書院)他。
中川要之助：応用自然史研究室「人と大地」室長。著作:『人と暮らしと大地の科学』(法政出版)
高原光：京都府立大学大学院生命環境科学研究科教授（当時）。著作:『シリーズ現代の生態学2 地球環境変動の生態学』〔共著〕(共立出版)、他。
黒田慶子：神戸大学大学院農学研究科教授。
高田研一：NPO法人森林再生支援センター常務理事。
安藤信：公益財団法人阪本奨学会理事。元京都大学准教授。著作:『森林フィールドサイエンス』〔共著〕(朝倉書店)
高桑進：京都女子大学名誉教授。著作:『京都北山 京女の森』(ナカニシヤ出版)他。
丘眞奈美：合同会社京都ジャーナリズム歴史文化研究所代表。歴史作家。著作:『松尾大社~神秘と伝承~』(淡交社)他。
梶川敏夫：京都女子大学文学部非常勤講師。元京都市考古資料館館長。著作:『よみがえる古代京都の風景―復元イラストから見る古代の京都―』、他。
吉岡洋：京都大学こころの未来研究センター特定教授（当時）。
高橋義人：平安女学院大学国際観光学部特任教授。京都大学名誉教授。著作:『悪魔の神話学』(岩波書店)他。
広井良典：京都大学こころの未来研究センター教授。著作:『人口減少社会のデザイン』(東洋経済新報社)他。
田中和博：京都先端科学大学バイオ環境学部学部長。著作:『古都の森を守り活かす―モデルフォレスト京都』（編著、京都大学学術出版会)
○コラム
近藤高弘：陶芸・美術作家
大西宏志：京都造形芸術大学教授
○特別寄稿
大西真興：清水寺執事長。
山折哲雄：京都伝統文化の森推進協議会初代会長。宗教学者。

北村典生：祇園商店街振興組合理事長。いづ重主人



（2）ライブ曲順　（◎印、カマタがギターを弾く曲）

１．「神ながらたまちはへませ」

２．「ある日　道の真ん中で」

３.「南十字星」

４.「みなさん天気は死にました」 （第三詩集『狂天慟地』より）

５．「 フンドシ族ロック＋世界フンドシ黙示録」

６．「探すために生きてきた」

７．「犬も歩けば棒に当たる」

８．「「北上」

９．「時代」

１０．「夢にまで見た君ゆえに」

１１．「メコン」 （第三詩集『狂天慟地』より）

◎１２．「銀河鉄道の夜」

◎１３．「巡礼」

アンコール曲2曲

◎１，「なんまいだー節」

◎２，「弁才天讃歌」

曲順コンセプト

今のウクライナ戦争など、世界情勢や気候変動による激烈な環境破壊のことなどを考え、『絶体絶命』を1曲目「神ながらたまちはへませ」の祈りから入り、最後13曲目「巡礼」の祈りで閉じる。

１＝起：「神ながらたまちはへませ」から入り、次に悲しみに暮れる「悲嘆」を歌う「ある日　道の真ん中で」と「南十字星」を歌い、その3曲で、『絶体絶命』の中の悲嘆と祈りを表現する。

２＝承：その後、「みなさん　天気は死にました」の詩の朗読で、その悲嘆の背後にある絶体絶命の状況を説明し、その中で物狂い状態で「フンドシ族ロック＋世界フンドシ黙示録」を歌い、そこにストレートな「探すために生きてきた」を続け、「犬も歩けば棒に当たる」のロック調3曲を続けるという配列とする。

３＝転：その後、東日本大震災の悲劇と悲哀と悲嘆と鎮魂を詠った「北上」で起承転結の「転」に入り、「時代」と「夢にまで見た君ゆえに」のバラード風の歌でまとめる。

４＝結：最後の「結」として、「希望」の垣間見える「メコン」「銀河鉄道の夜」にして、最後は「祈りの言葉さえ知らない祈り」を捧げて終る。